

## 研究プロジェクト

# 認知的文化差異の基盤に関する研究 ：調整型・影響型対人関係の役割

宮本百合（ウィスコンシン大学マディソン校心理学部助教）

## ■プロジェクトの目的

物をどのように知覚するかには個人によって違いがある。例えば、中心となる物に主に注意を向ける「分析的な知覚傾向」を示す人と、物を取り巻く状況や文脈情報に注意を向ける「包括的な知覚傾向」を示す人とが存在している。しかしながら、こうした知覚傾向は、個人ごと完全に固定されたものではなく、それぞれのおかれた社会的・文化的環境の影響を受けて変化していると考えられる。本連携研究プロジェクトでは、人間の知覚傾向がどのような個人的、社会的、文化的要因によって影響を受けているのかを探った。特に、対人関係の中での力関係が知覚傾向にどのような影響を受けるのか、そして、そこに文化差が存在しているかどうかを検証した。

## ■リーダーは文脈を無視するか？

まずアメリカのウィスコンシン大学で行った実験では、参加者に実験室の中でリーダー、もしくはフォロワーの役割を体験してもらい、その後に参加者の知覚傾向がどう変わるかを検証した。参加者は、リーダー、もしくはフォロワー役にランダムに割り当てられて、コミュニケーション課題に取り組んだ。この課題に取り組むことで、各参加者にリーダーとフォロワーのそれぞれの役割に沿った考え方を喚起した。このコミュニケーション課題が終わった直後に、各参加者に「線と枠課題」とよばれる知覚課題に取り組んでもらった。この線と枠課題は、正方形の枠の中にある線の長さを判断する知覚課題であり、この課題の成績を見ることで、中心的なものに焦点を当てる分析的な知覚と、背景にある文脈情報に注意を払う包括的な知覚とを測定することができる。

この線と枠課題において、リーダー役のアメリカ人は、フォロワー役のアメリカ人よりも、分析的な知覚傾向を示していた。つまり、リーダーになったアメリカ人はフォロワーになったアメリカ人よりも中心にある物にのみ注目して、文脈を無視するようになっていたのである。リーダーとして他者に影響を与えるためには、自分の目標の対象である中心となる事物に注目し、それ以外の周辺の場や文脈に注意をそらさないことが重要であることが示唆される。

さらに京都大学でも日本人学生を対象に同様の実験を行った。日本での実験を計画した当初は日米で同じ結果になることを予想していた。リーダーにとって分析的であることは文化普遍的に重要であると思われた。しかし、ふたを開けてみると、日本ではアメリカとはまったく異なる結果になった。日本ではリーダー役、フォロワー役にかかわらず、全体的にみんなが包括的な知覚傾向を示していたのである。むしろ、リーダー役の方がフォロワー役よりもやや包括的であった。つまり、リーダー役になった日本人はフォロワー役になった日本人と同程度か、それ以上に、対象と文脈との関係性に目を向けており、背景にある文脈を無視できなくなっていたのである。

## ■リーダーのあり方の日米差

当初の予測と異なる日本人の実験結果は、よく考えてみれば非常に納得のいくものであった。結果から考えると、日本において、リーダーとして他者に影響を与えるためには、自らの目標だけでなく、他者の気持ちや関係性といった文脈的な情報にも目を向けないといけないのかもしれない。一方、アメリカにおいては、リーダーとして他者

に影響を与えるためには、文脈的な情報に惑わされることなく、自らの目標に注目する必要があるのかもしれない。これは、リーダーシップのあり方が文化によって違うことを示唆する過去の知見とも一致する。

社会心理学者の三隅二不二らによれば、リーダーシップには集団維持と目標達成の両方の機能があり、どの機能が重視されるかは組織や文化の性質によって異なる。アメリカにおいては、リーダーシップの機能として目標達成が一番大切なのに対して、日本においては、リーダーとして目標達成をするためには、関係性に目を向ける集団維持も不可欠だと考えられる。包括的な知覚傾向はそんな集団維持機能を果たす上で役立つのかもしれない。

## ■今後の展望

本研究から、知覚傾向は対人関係内での役割によって規定され、さらにその規定のされ方は文化によって異なることが示された。この結果から考えると、社会的地位によっても知覚傾向は異なっている可能性が考えられる。そこで現在、この研究をさらに進めて、人間の認知傾向が社会経済的地位によってどのように影響を受けているかを探っているところである。今回の結果が社会経済的地位にもあてはまるとしたら、アメリカにおいては、社会階層が高い人は、低い人に比べて分析的知覚傾向を示すかもしれない。一方、日本においてはそのような関係は見られないかもしれない。このような試みを通して、知覚という非常に基礎的な認知プロセスを、社会・文化的な枠組みの中でとらえていきたいと考えている。